

未来を生き抜く子どもたち①

教科書が読める子どもを育てていますか？

2018.05.29

No.14

校長 渡邊 幸二

今日から何度かに分けて「未来を生き抜く子どもたち」というテーマで、右掲の「AI vs 教科書が読めない子どもたち」を自分なりの解釈を加えながら紹介したいと思います。

その前にまず……

やり直しの避難訓練

今日は避難訓練のやり直しもありました。それを考えれば、“未来を生き抜く”前に、まず“今を、そして危機的状況を生き抜く”力が付いたかどうか問われます。さて、子どもたちに、本当に危機意識が芽生え、自らの力で命を守る危機回避能力が付いたでしょうか。みなさんはどう思いますか。

前もお話したように、避難訓練は「訓練のための訓練」であってはなりません。ですから“～な時はどうしたらいいですか？”なんて、いざという時に他人の脳みそに頼っているようではダメなわけです。子どもも指導者も……。

ある大枠としてのマニュアルは絶対に必要です。しかし、先日の大川小の判決に見られるように、自治体のハザードマップですら信じちゃいけない、日頃子どもの命を預かっている学校(職員)自らが考え、判断しなければならないわけです。マニュアルもある意味机上の空論・想定です。実践をとおして、よりリアルに対応できるものに改善していかなければならないと思います。それには、子どもの感覚、職員の危機センサーが大事になります。それらをフルに発揮していただき、自らの力で安全に暮らせる子どもに育てていきましょう。

脅威の「東ロボ君」

よくAIが将棋の名人を負かしたのだの、〇〇に勝つのだのという報道を聞きます。そんな話を聞くと、“シンギュラリティはもうすぐなのか！”などという不安に駆られていました。

では、実際はどうなのでしょう。

この著者が取り組んでいるのは、AIを使って、東京大学に入学できるロボットをつくるというミッションです。センター模試やマーク模試などの指標を使って、どの程度の正解を導き出せるかで、そのロボットの性能を見ているわけです。

で、どうなったと思います？

初めて受験した2013年の模試では、5教科7科目900点満点で、その得点が387点だったとか……。全国平均の459.5点を大きく下回る成績で、偏差値でいうと45だったそうです。もしかすると、これでも「うちの息子よりいい成績だわ！」



なんて言う方もいるかもしれません。偏差値45なんて、我が家でも見たことあるような数値です。



そして、その3年後、2016年に受験したときの成績は、5教科8科目950点満点で525点！なんと平均得点437.8点を大きく上回り、偏差値も脅威(驚異)の57.1をマークしたのです。

これはどれほどの成績かという解説もありまして、全国の国公立大学172校のうち、23大学の30学部53学科で、合格可能性80%の判定をゲットしたのです。私立大学で言うと、明治や青学、立教、中央、法政の

他、関西、関西学院、同志社、立命館などの有名私大の一部の学科も含まれていたというのです。

この事実は何を意味するのか？

お～！すげー!!日本のロボット技術もたいしたもんだなんてのん気なことを言っている場合ではありません。この事実を、簡単に言うならば(大変失礼な話で不適切な表現でしょうが)、**AIの得点を下回った受験生がたくさんいた**ということです。

ということは、もし、世の中がやがてAIの時代がやってきて、AIがやる仕事が多くなったとしたら……。就職しようとしたら、仕事がAIに取って代わられていた、仕事がない…ということではないでしょうか。そういう未来がもうすぐそこまで来ているわけです。

目の前にいる浜田っ子や、私たちの子どもや孫の世代は、有名大学にすうっと入れる実力を持ったAIロボットがライバルなわけなのです。浜田っ子たちのたとえば10年後、AIもさらに進化していると思いますが、そんなAIをライバルにして生きて行かなければならないということもできるわけです。

私が学校経営方針の中で「**今ある答えややり方を受身的に何の疑問もなく覚え、それをいくら効率的に再現・再生できるようになったとしても学力としては全くの片手落ちです**」と述べているのはそういうことです。知識等の再現・再生というAIの得意分野では、子どもたちの勝ち目は絶対にありません。

では、どうすればいいのでしょうか。

私たちは、子どもたちに何を教えていけばいいのでしょうか。

昨日、山形大学の江間史明先生の講演を聞く機会がありました。その中にもヒントがありましたが、**今の浜田の方向でまちがっていないことだけは確かです。**

おいおいご紹介していきます。

(本を読みたい方は市立図書館にもありますので借りて読んでみてください)

